



困った行動の直前・直後の出来事に注目

学校訪問相談では、通常、授業中の対象児の行動観察を1時間、その後話し合いを行っています。事前にある程度の情報はいただくものの、多くは初めて見る子であり、ましてや複数の子となると、どうしても大まかにしか語れない難しさがあります。

対象児の心情や意図に迫るためには、困った行動が**なぜエスカレートしているのか**、あるいは**高止まりの状態にあるのか**を、継続的な行動観察を通して明らかにしていく必要があります。そこから見いだされることをもとにして、対応に繋いでいくのです。

この方法を体系化したのが**応用行動分析（Applied Behavior Analysis：ABA）**です。何やら面倒そうですが、実はかすたネットでも参考に行っている分析方法です。おそらく先生方の中にも、意識はしていなくても実践している方は多いと思います。

本号から4回にわたり、その基本的な考え方や進め方について紹介します。

応用行動分析では、その名の通り、標的とする「行動」を分析します。行動には必ず理由があると考え、その行動の理由を知るために、**行動自体の観察に加えて、行動の直前・直後に起こった出来事を記述**します。この作業がとても重要になります。



下の表は1つの例ですが、標的とする行動の事実を記入する欄、そしてその直前・直後にどんな出来事があったかを記入する欄の3つの枠を中心に構成されています。

当該児の行動は、具体的に状況が分かる記述とすることが大切です。適切な記述であるかは、「**死人テスト**」を**通過できるかどうか**でチェックできます（妙な名称ですが、行動分析学の基礎用語です）。死人でもできるような、否定形（返事しない、何も書かない等）、受け身形（注意される等）、状態（黙っている、じっとしている等）の記述は行動とは言いません。死人にはできないこと（話す、出歩く、物を投げるなど）が見られたら書き出します。

直前の出来事・直後の出来事は、**行動と時間的に連続して直前・直後に何が起こったか、**事実に基づいて記述します。誰が誰に何をしたか（言ったか）や、どんな場面・状況にあったか（なったか）など、**読んだ誰もが、子どもの同じ姿を思い描けるような記述**とします。

行動記録表									
月	日	曜日	校時	教科	直前の出来事	当該児の行動	直後の出来事	観察者	
7	14	金	5	算	行動と連続する時間に 起こったことを記入	死人にはできない 表現で記入	行動と連続する時間に 起こったことを記入		

一定の期間を設けて、専任の観察者が対象児から目を離さず、記録できる体制が取れば理想ですが、困難な場合は、複数の教師で分担したり、問題が生じやすい授業等に絞って観察・記録したりするなど工夫します。そして、集まった記録をもとに、直前・直後の出来事と行動との関係を検討し、行動の目的や意味を探っていきます。

<次号に続く>

担当 学校生活適応支援アドバイザー（飯山・大瀧）
TEL 639-4392